

問 題

次ページの文章を読み、「他人とかかわってゆくときの重要な媒体」としての「音楽」の特徴と何か、また「言葉」との類似点や相違点は何か、具体的な例や自身の体験に基づいて、800字以内で論じなさい。

なお、論点を明確にするため題を付け、解答用紙の1行目に書くこと(題は800字以内に含む)。
試験時間は60分とする。

問題文

「歌い、鳴らし、聴く音楽——音楽療法の試み 1998 冬」

音楽とは不思議なものである。「潤いをあたえる」という言葉がほんとうにびったりくるほど、ささくれた心、渴いた心、落ち込んだ心を慰撫してくれる。文字どおり、撫でるように、肌にそっと触れるようにである。震えるような旋律がまるで涙のひとしずくのように感じられることもある。音楽によって心が慰められないなら、音楽が幼児から老人までこれほど広く愛されることはないだろうし、音楽産業がこれほどに巨大なものになることもなかっただろう。

だが、音楽はまた政治的なものでもある。いのちや感情の弾みを本人もコントロールできないくらいに増幅するだけでなく、ひとになにかを激しく促したり、共通の気分のなかに浸らせたり、全体行動を強いたりするし、ときには労働の能率を上げるために導入されたりもする。

ファシズム的な集団の熱狂においても、力つきた敗残者の逃避行のなかでも、葬送の儀礼（御詠歌や読経）においても、^{まがまが}禍々しい暴力を、最後の勇気を、深い哀悼の情を内から絞りだそうと、ひとは声を響かせあう。音楽には、それほどにひとを揺さぶるところ、情動の深みから動かすところがある。ひとは失意のなかで涙とともにメロディーを口ずさみもするし、気がつけばうきうきハミングしていることもある。言葉と同じく、それはひとを慰めもすれば^{そそのか}唆しもする。

とはいえそれはやはり、言葉と同じく、他人にかかわってゆくときの重要な媒体である。だから、語りあい、聞きあうところに自他の深い交感があるように、歌い、鳴らしあい、聴きあうところにも深い交感が起こる。カウンセリングがあるように、音楽によるセラピーというものもありうると、とりあえずは予想できる。（後略）…

出典： 鷲田清一著『新編 普通をだれも教えてくれない』（2010、ちくま学芸文庫）

※ 一部にふりがなを加えている。

——問題文は以上